

＜ 近世日朝関係の再考—長崎を組み込むこと— ＞

研究年度 令和6年度

研究期間 6年度～8年度

研究代表者名 松尾晋一

はじめに

本研究の目的は、17世紀から18世紀における朝鮮—対馬—長崎の関係解明である。従来の当該期の日朝関係研究は、朝鮮—対馬—幕府を主に対象としてきたが、幕府の对外政策の拠点は一長崎であり、江戸との関係には及ばないものの、ヒトとモノの移動が活発に行われ、ここには日朝関係に関係するものが多く含まれていた。長崎を組み込んだ日朝関係こそ、近世という時代とも言えなくもないはずだが、従来の研究では長崎が意識されてこなかった。

以上のような先行研究の理解をふまえて、1年目の今年度は、韓国国史編纂委員会、長崎県立対馬歴史研究センターへの調査を行い、幕府・対馬・長崎の関係を確認する作業を行った。

1. 資料収集作業

韓国国史編纂委員会、長崎県立対馬歴史研究センターで史料調査を行い、下記の確認を行った。

◎韓国国史編纂委員会所蔵資料

記録類	310	3693	長崎勤役
記録類	416	4715	対州朝鮮不特往復書翰扣
記録類	417	4720	御書簡請取帳（1683年8月）
記録類	418	4733	御書簡請取帳（1683年8月）
記録類	437	4969	御内用書状
記録類	437	4970	朝鮮御書簡之倭文（1657年～1691年6月）
記録類	532	6263	長崎役佐治軍吾之來狀寫（年紀未詳（3月））
記録類	544	6415	含書并半切内狀〈合五十四通〉（年紀未詳）

*このほか、文書Ⅰ～Ⅲのうち70点を確認。

◎長崎県立対馬歴史研究センター

- 【一紙物 1007-21-7】[覚]（対州佐保村へ漂着候琉球人長崎へ送還に付）
- 【記録類 1-1-L-9】長崎発記録
- 【記録類 1-1-M-15（3）】長崎漂民間情書類
- 【記録類 1-3-F②-71】長崎役方送状
- 【記録類 2-17-I-5】長崎来状
- 【記録類 2-17-I-13】長崎来状
- 【記録類 2-22-G-4】長崎江之御状案控
- 【記録類 2-23-0-18】長崎・田代・博多・佐賀、平戸江遣候書状控
- 【記録類 3-39-11】[長崎役方往来関係記録]
- 【記録類 3-39-13】[長崎入津紅毛船関係綴]
- 【記録類 3-43-B-4】長崎御役人衆御応対書
- 【一紙物 972】[伺]（長崎聞役小嶋左七郎ほか被仰付度ほか）
- 【一紙物 1048-47-2】[廻達状]（長崎勤番通詞園田松之助、在勤中御除物役兼勤被仰付ニ付）
- 【一紙物 1060-33-1（2）】口上手控（長崎聞役寺崎直左衛門ほか精勤に付相当御沙汰願）
- 【一紙物 1060-33-5（1）】[願]（長崎聞役寺崎直左衛門多年滞留精勤に付相当御沙汰）
- 【一紙物 1060-33-5（2-2）】手控（長崎聞役寺崎直左衛門格別労勤に付宜御沙汰願）
- 【一紙物 1080-6】覚（八木九左衛門長崎役差免、佐伯市左衛門へ伺差返、大庭鉄蔵留守へ可慎に付）
- 【一紙物 1111-33】公儀より長崎奉行所江被仰出候御書キ物
- 【一紙物 1111-242】[廻章]（長崎勤番通詞山田虎之助帰崎被仰付に付）
- 【一紙物 1114-115】[書状]（山川作兵衛代長崎聞役の儀渡辺庄左衛門へ仰付度存寄被仰下度）

2. 研究成果

- ・貞享3（1686）年の幕府対外政策を事例に幕府・対馬・長崎の関係を確認した。
対馬宗家が幕府からの指示に従うため長崎奉行の考えを知ろうとする動きを見せ、

その役割を担ったのが津江左太郎であったこと。そして対馬宗家が期待した情報を得られなかったことがわかった。ここから対馬宗家の期待に応えられなかった当時の長崎の政治環境が知れたわけだが、おそらく幕府が期待した状況でもなかったであろう。幕府対外政策は、こうした構造的課題を常に抱えていたのであり、長崎における幕藩関係の理解を深めていくためにはこうした点に配慮して研究を進めていく必要があることを指摘した（松尾晋一「対馬宗家の長崎との関りに関する考察―貞享三年の幕府対外政策を事例に―」『長崎県立大学論集（経営学部・地域創造学部）』58巻2号、2024年、9月）。

3. まとめにかえて―今後の課題―

貞享4（1687）年に長崎へ派遣された津江左太郎が国元（対馬府中）へ訴状を送っていることがつぎの『毎日記』（日記類 Aa-1-65 貞享4年9月14日条、対馬歴史研究センター蔵）に記録されていることを確認した。長崎市中の経済状況や他家から長崎に派遣されている家臣（長崎聞役）の事情などが記されており、今後分析に着手する。また、時期不明の「長崎入津紅毛船関係綴」（【記録類 3-39-13】長崎県立対馬歴史研究センター蔵）には、過去の長崎聞役を検証した記録が記載されていて、対馬と長崎の関係構築が検証できる。

次年度は、まずこれらの分析に着手し、その後二年目の目的であるモノに注目して、日朝関係に果した長崎の役割を解明していく。